2023年度研修旅行 韓国コース 実践報告

前　野　桃　子（外国語科）

1．はじめに

2022年秋、次年度に迫った60期生の研修旅行の行き先の一つが中国深圳から韓国に変わり、テーマは「グローバルパートナーシップ」と決まった。2020年代の今にふさわしい韓国研修旅行とはどのようなものか―行き先が韓国だけに、大きな問いをつきつけられたように感じた。中央大学杉並高等学校は、2002年、韓国の中山外国語高等学校と当時の“最先端”の国際交流を実現し、10年以上交流を続けた。それから20年。今度は、「研修旅行」という形で、70人もの生徒たちを再び韓国へ連れて行くことになる。それは、この20年間の日本と韓国の変化を反映させた、今現在の“最先端”の研修旅行でなければならない、このような思いを強く持ってのスタートとなった。

2.　現在の高校生にふさわしい韓国研修旅行とは

2023年2月、韓国コースに参加することが決まった70名の生徒たちにアンケートを取り、韓国について興味があることは何か聞いてみた。出てきたキーワードは以下の通り。

1	食文化	40人	6	ドラマ	8人
2	K-POP	26人	7	高校生の生活・流行	5人
3	ファッション	13人	8	日韓関係・歴史認識	5人
4	韓国語	12人	9	朝鮮戦争・非武装地帯	5人
5	コスメ	9人	10	韓国エンタメの世界進出	4人

その他のキーワード
学歴社会
キャッシュレス社会
サッカー選手
英語教育
整形
e-sports　等

半数以上の生徒が韓国の食文化をあげ、音楽・ドラマ・コスメ・ファッションなどに興味を持つ生徒が多いことがわかった。中には、「なんでも韓国のものが大好き」など韓国に対して強い憧れを持つ生徒たちも多いという印象を受けた。

本校が韓国との交流を始めた2002年の翌年2003年、ドラマ『冬のソナタ』が大流行したことで「第１次韓流ブーム」が始まった。その後、“KARA”や“少女時代”のようなK-POPグループが日本のメディアに進出した2010年頃「第２次韓流ブーム」があったが、2012年、領土問題などで日韓関係が冷え込んだことが原因で文化的交流も減少し、ブームは減退したように見えた。しかし、韓国のポップカルチャーに対する熱は、Z世代(1990年半ば～2010年代生まれ)の間で広まっていた。「韓国っぽい」メークやファッションはYouTubeやSNSを通して若者を魅了し、K-POPの人気は、主流メディアへの露出がなくとも続いていた（「第３次韓流ブーム」)。そして、TWICEやBTSの世界的ブレークや、アカデミー賞作品賞受賞映画『パラサイト』で、韓国コンテンツに対する認知度は上の世代でも大きく上がる。その後、2020年、コロナ禍での巣ごもり需要で、Netflixなど配信サイトによる韓国ドラマが爆発的人気となり、「第４次韓流ブーム」が訪れ今に至っている。

2006～2007年生まれの60期生は、Z世代のど真ん中。幼少期からK-POPを聴き、デジタルネイティブとして手にしたスマートフォンでYouTubeやSNSを渡り歩き、韓国のポップカルチャーに親しんできた世代である。アンケートを見ても、こちらの想像以上に、韓国に対して高い関心を持っているようだった。

そもそも、このようなアンケートを取ろうと思ったきっかけは、その１ヶ月前に下見で韓国に行った時に受けた印象だった。訪問した韓国観光公社で日本の修学旅行生の行き先としてプロモーションされた場所は、定番の観光地ではなく、「韓流カルチャー」を体験できる場所や都市再生事業でリノベーションされた新スポットだった。実際に行ってみると、10年、20年前にはなかった

風景があり、エネルギッシュな若者の姿が垣間見えた。また、自分自身の意識も「韓流カルチャー」に向けてみると、魅力的なエンターテイメントの世界があり、世界中の人を惹きつけている理由を理解することができた。これからの日韓の若者の「グローバルパートナーシップ」がテーマである以上、研修旅行の内容を、「今の韓国」を軸にしたものにすべきなのは明らかだった。そしてその「今の韓国」を最先端で追いかけているのは、間違いなく生徒たちの方である。その関心に十分に応え、それぞれの「探究アクション」を意義深い体験にするためには、こちらが生徒たちからヒントを得ながら内容を考える研修旅行にすべきなのだろうと思わずにはいられなかった。

もちろん、そのような「今の韓国」は意図的に作られた表層的なイメージであり、学校で「探究」すべき社会問題や国際問題は他に存在するという考え方もあるだろう。しかし、「探究」は生徒たちの内的モチベーションと結びつかない限り、それこそ表層的な、形だけのものになってしまう。生徒たちが今、本当に興味があることを入り口にしてこそ、「探究アクション」が生徒にとって意義深い体験になるはずだと信じて、行程を考えることにした。試行錯誤の末に決まった行程は、１日目に非武装地帯、２日目に学校交流、３日目にB&Sでグループごとに「探究アクション」、４日目に自由行動という、ほぼ枠組みのみで、中身はこちらの采配次第という自由度の高いものになった。

3.　事前学習

(1) 研修リーダープロジェクト　1学期の活動

春休みの課題「研修先の書籍を読もう」

研修リーダーの生徒たちは、春休みに韓国に関する本を読み、その内容についてグループで共有し合った。また、グーグルサイトで作成したホームページ「韓国の部屋」に「おすすめ本」を紹介するページを作り、生徒たちにそれぞれの本の紹介を入力してもらった。生徒が選んだ本のタイトルは以下の通り。エンターティメントに関する本が多く存在することに驚いた。

文　化	『箸とチョッカラク』『韓国カルチャー』『知っておきたい！韓国ごはんの常識』『そっか、日本と韓国ってそういう国だったのか』『線を越える韓国人　線を引く日本人』『日本人が知りたい韓国人の当たり前』『韓国行ったらこれ食べよう』『韓国 Q&A』『韓国―食の文化』
エンターティメント	『韓ドラ語辞典』『韓国ドラマ』『韓国ドラマ！推しが見つかる究極100本食堂』『韓国ドラマの知りたいこと、ぜんぶ』『大人もハマる！韓国ドラマ』『K-POP bibimbap』『K-POPはなぜ世界を熱くするのか』『K-POPはいつも壁をのりこえてきたし、名曲がわたしたちに力をくれた』『韓国コンテンツのグローバル戦略』『韓国エンタメはなぜ世界で成功したのか』
韓国語	『コツコツ知ろう 韓国の社会と文化』『韓国語は、ことわざ慣用表現から学ぶ』『韓国語』
歴　史	『韓国社会の現在』『一冊でわかる　韓国史』『朝鮮王朝 500年史』『ソウルおとなの社会見学』
観　光	『せかたびソウル』

研修先に関する動画作り

4～5人のグループに分かれて、韓国に関する動画作りをした。それぞれのトピックとキーワードは事前に決められており、その内容を含む動画を作ることが求められた。「動画」なので、スライドを使ったプレゼンテーションをつなげたような作品では意味がない。内容だけでなく、映像の使い方、ナレーションの入れ方、音楽や音声の使い方、そして全体の統一感や、見やすくするための演出、そしてエンタメ性が必要になってくる。生徒たちは、限られた時間の中で頑張っていたが、「動画」を求めるならもう少しカバーする内容を限定し、より少ない人数のグループで取り組むべきだったと思う。トピックとキーワードは以下の通り。

トピック	キーワード
政治・経済	韓国の大統領制　軍事境界線と非武装地帯 太陽政策と南北首脳会談　韓国の徴兵制　韓国の財閥
歴　史	秀吉の朝鮮出兵と李舜臣　日本植民地時代 朝鮮戦争朴正熙と日韓基本条約　漢江の奇跡
伝統文化と継承①	食文化　キムチ　民族衣装と伝統生地
伝統文化と継承②	ハングル　韓屋　オンドル　世界自然遺産・文化遺産
現代社会・文化①	コスメ　屋台・市場　ドラマ　都市再生と観光　スポーツ
現代社会・文化②	フード　教育　K-POP　e-sports

１学期の終わりに、韓国コースに参加するリーダー以外の生徒に、完成した動画を見せ、さらに興味を持ったことや今後調べたいことを発表した。また、ホームページに全ての動画を載せて、その後も参考にできるようにした。

(2) 参加者全員での事前研修 夏休み～2学期の活動

夏休みの課題　個人探究

個人で、興味のあるテーマに関して、スライドや動画を作成した。条件は、ただ調べるだけでなく、どこかへ実際に行って調査したり、誰かにインタビューしてみること。生徒たちは、新大久保を訪れたり、韓国ドラマ好きの祖母にインタビューしたり、言語交換アプリHelloTalkを使って韓国の若者に質問したり、それぞれが工夫してスライドや動画を仕上げた。生徒たちが取り組んだテーマは以下の通り。

エンターティメント	「韓国ドラマの魅力とは？」「韓国ドラマ」「韓国ドラマは本国で人気はあるのか」「韓国ミュージカル」「韓国のクラシック音楽」「K-POP アイドルについて」「韓国アイドル」「韓国のアイドルはどのように活動しているのか」「留学、アイドル、語学」「なぜライブは韓国では撮影OKなのに日本では禁止なのか」「韓国で流行しているJ-POPについて」「ウェブトゥーンの人気の理由」「韓国のe-sportsについて」
ファッション・美容	「韓国のコスメについて」(5)「韓国のコスメと日本のコスメの違い」「韓国コスメ 5年前と現在の人気の推移」「韓国風メイクの流行について」「韓国コスメはなぜ人気なのか」(３)「韓国ファッションについて」(2)「韓国で流行し、定番となったY2Kファッションについて」「美容」(2)「韓国の美容歴史」「韓国の美容と食」
言　語	「韓国の文字について」(2)「ハングル、言語の歴史」「韓国語スラング」
食文化	「韓国の食文化」(4)「韓国の食事はどのようなものか」「韓国グルメはなぜ人気？」「なぜ韓国料理は辛いものが多いのか」(2)「韓国と日本の食事におけるマナーの違いとその理由はなにか」「韓国のお菓子にはどのようなものがあるのか」「韓国の料理と食事マナー」「韓国の食　日本の料理(食材)と韓国の本場の食材の違い」「韓国の食事は日本と何が違うのか」「韓国の食器がなぜ鉄なのか」「韓国のりと日本ののりの違い」「日本と韓国のキムチの作り方の違い」「キムチの美白効果」「サンナッチ」
教　育	「韓国の高校生について」「韓国と日本の食文化や勉強面の違い」「韓国平準化政策と高校」「韓国と日本の学校生活の違い」「なぜ日韓で英語力の差があるのか、英語の勉強法の違いとはなにか。」
観　光	「韓国の観光地について」「韓国の世界遺産」
社　会・政　治	「日本と韓国は仲が悪いのか」「日本で韓国ブームが起こったのはなぜなのか？」「日本と韓国はどうやったら仲良くなるのか？」「なぜカルチャーは日本あるいは世界に受け入れられるようになったのか？」「韓国内での韓国文化の浸透」「在日韓国人について」「DMZ(非武装地帯)」「日本と韓国の違い」「夏休みに実際に韓国へ旅行に行って気づいた日本と韓国の違いは？」

※(　)内数字は同テーマの数

探究アクション

夏休みの個人探究テーマをもとに、研修リーダーがグループを作り、「探究アクション」が始まった。グループで話し合い、「問い」のアイディアが出た段階で、担当教員が関連のありそうな本やネット記事を紹介し、視野を広げられるようにした。最終的に以下のような問いに取り組むことになった。

「韓国エンターテイメントが人気の理由」
「今までの流行の特徴を考察する」
「兵役免除についての考えとスポーツとの関係」
「外国人観光客向けのサービスの充実さ、日本との違い」
「韓国人のメイクこだわりポイント」
「韓国のクリスマス」
「韓国と日本のカフェの違い」
「日本と韓国のコンビニの違いから２国間のニーズ、傾向の違いなどを調査」
「最新エンタメ事情を考察するために、メタバース観点でトレンドを調査」
「チマチョコゴリと旧正月」
「K-POPのアイドル文化」
「スポーツを通した日韓関係」
「韓国国内の食生活の実態を調査して伝統食離れの解決策を提案する」
「韓国コスメの経済効果」
「韓国の美意識、美容」
「韓国と日本の伝統食離れの違いとは？」
「リアルな食生活を考察するために韓国料理屋を調べる」
「日韓の文化や歴史による見え方の違い」

仁川国際高校との交流準備

7月、学校交流の相手校は仁川国際高校と決まった。夏休み中に韓国へ行っ

た際に、国際交流担当の先生にお会いし、生徒同士で作り上げる交流会を目指してはどうか、という話になった。そこで、研修リーダーの中から、実際に仁川国際高校の生徒たちと連絡を取り合い、交流会を企画したい生徒を募った。３人が手を挙げ、10月に第1回目のZoom会議を行った。仁川国際高校側は、生徒会の高校１年生たちが交流企画の主体となっており、第１回目の会議では、どのような交流会にしたいかお互いの意見を出し合った。こちらの交流担当の生徒の１人が韓国語を話すことができたので、時に英語を交えながら、主に韓国語で会議は進んだ。このZoom会議の後は、生徒同士がSNSのダイレクトメールを使って連絡を取り合うことになり、教員同士はメールで進捗状況を確認し合ったり、スケジュール全体の調整を行ったりした。

交流の内容は、最終的に、①グループで話をして交流を深める時間　②昼食　③両校によるパフォーマンス　④写真撮影などお別れタイム、と決まった。中杉は、K-POP３曲とソーラン節を踊ることになり、交流係の３人を中心にグループ分けが行われ、主に冬休みに練習を重ねた。

4.　研修旅行の内容

（1）１日目―韓国の歴史と現状を知る日―

金浦空港に着くとすぐに２台のバスに乗り、非武装地帯(DMZ)へ向かった。空港から北へ約１時間、臨津閣（イムジンカク）が非武装地帯へ向かう拠点となる。臨津閣は、軍事境界線から南方約7kmの場所にある、平和と朝鮮半島の統一を祈願するために作られた公園で、自力で行くことができる一番北朝鮮に近い場所である。生徒たちはその敷地内で、朝鮮戦争休戦協定の直後に捕虜たちがイムジン川を渡って来た「自由の橋」や、フェンスに付けられたたくさんの南北統一を願うメッセージを見学した後、バスに戻り、非武装地帯(DMZ)へと向かった。非武装地帯(DMZ)には観光目的以外での民間人の立ち入りが禁止されているので、イムジン川を渡る前に、軍人がバスに入って来てパスポートをチェックする。今回は、名簿と照らし合わせながら生徒全員のパスポート

を見るのが大変だと判断したようで、一人一人のチェックはなかった。

まず最初に訪れたのは「第３トンネル」。北朝鮮が韓国に侵攻するために掘ったと言われる４つのトンネルのうち、３番目に発見されたもので、長さ1635m、高さ2m、幅2m、深さ73mで、１時間に軍人が3万人移動できる規模のトンネルだ。生徒たちは、DMZ展示館＆映像館で朝鮮戦争や非武装地帯について学び、実際にトンネルの中に入る。全員貴重品も含め全ての荷物をロッカーに預け、ヘルメットを着用し、急勾配の坂を下りて岩盤が剥き出しのトンネルエリアに入った。場所によっては屈んで歩かねばならず、足元も滑りやすい状態である。ダイナマイトを仕掛けた跡は黄色い印がついており、こんな岩だらけの場所を人力で掘り続けたということに驚くばかりである。最終地点はコンクリートで固めてあり、さらに奥には行けなくなっている。そこは北朝鮮まで約200mの地点だという。「この壁の向こう」に思いを馳せざるを得ない。

二つ目の訪問先は、都羅（ドラ）展望台。非武装地帯の韓国側の境界線上に建てられた展望台で、北朝鮮側を肉眼で見ることができる。生徒たちは望遠鏡を使い、北朝鮮側の開城（ケソン）工業団地や金日成の銅像、国旗掲揚台などを興味深げに見ていた。

DMZの文字のオブジェの前で

右側に北朝鮮が見える

統一村のお土産物屋

最後に訪れたのは、統一村。約400人が農業を営んで暮らしているが、常に警備下に置かれ夜間は外出禁止。危険な環境にあるため、納税や兵役が免除されているそうだ。観光客は、この村にあるお土産物屋に立ち寄ることができる。この地域の名産物（大豆、米、人参）に加え、DMZグッズや普通のお菓子なども売っている。韓国へ来て初めての買い物だったので、生徒たちは喜んで買

い物をしていた。

その後、バスはソウルへ向かう。１日目の夕食は明洞の食堂でプルコギ鍋定食。バスを降り明洞に入ると、非武装地帯とは全く違うキラキラの街並みに目を輝かせる生徒たち。昼食が早めの機内食だったこともあり空腹だったようで、みんなよく食べていた。食事後、乙支路４街の国都ホテルへチェックイン。

〈生徒の感想〉

韓国食堂らしい店内で
プルコギを

- *北朝鮮との戦争については全然知らなかったので驚きが多かった。*
- *第３トンネルの中を歩くのは大変だったが、その背景を知ることができて、より興味が湧いた。*
- *韓国と北朝鮮の間の緊張感を感じることができた。*
- *休戦協定を結んで２つに分かれてしまった国の向かい合う場所にいることを体感できた。*
- *「休戦中＝戦争は終わっていない」ということをありありと実感できた。*
- *望遠鏡で北朝鮮を見られたことが新鮮だった。*

(2) ２日目―同世代と交流する日―

松島セントラルパーク
から臨む高層ビル群

朝８時過ぎにホテルを出発して、仁川へ向かう。まず松島（ソンド）の仁川松島セントラルパークへ。松島（ソンド）の正式名称は「松島国際都市」で、経済自由地区として海外企業が拠点を持ち、近代的な高層ビルが立ち並ぶ、「韓国のドバイ」とも呼ばれる地域。松島セントラルパークはその中心にあり、多くの木々や海水で作られた水路と、背景にそびえる高層ビルのコントラストが美しく、ソウルの町の雑多な感じとは違った雰囲

気を楽しめる場所だ。この公園を30分ほど散策した後、仁川大橋を渡り、いよいよ仁川国際高校へ向かう。

仁川国際高校は、仁川空港のある永宗島にある全寮制の公立共学高校。今回は学校が冷暖房の工事中で、近くにある「東アジア国際教育院」を会場に交流活動をすることになった。1月の初めは冬休み中で仁川国際高校の生徒たちは帰省中だったが、本校との交流のために75名の生徒たちが臨時バスで登校し、歓迎してくれた。

中杉生たちはあらかじめA〜G７つのグループに分かれており、アルファベットごとにバスから降りて、各チームのリーダー生徒と合流した。リーダーは、仁川国際高校生徒会のメンバーで、この後のグループ活動をリードする役割を担っていた。さらにチーム内では、中杉生一人に対して仁川国際高校の生徒が一人、バディとして決められていた。中杉生は、アニメキャラクターの書かれたカードをもらい、対応するカードを持つ仁川国際高校のバディ生徒を見つけてペアになった。このシステムについては当日朝まで両校の担当生徒同士で打ち合わせを重ねていたようだ。生徒たちにバスの中で、クラスルームを通じてキャラクター対応表を流しておいた。

しんのすけ	ひまわり	花垣武道	橘日向
ドラえもん	のびた	ロイド	ヨル
桜木花道	流川楓	高木さん	西片
ナルト	サスケ	日向翔陽	影山飛雄
炭治郎	彌豆子	緑谷出久	爆豪勝己
ゴン	キルア	キリト	アスナ
工藤新一	毛利蘭	02	ヒロ
エレン	ミカサ	ちびまる子	たまちゃん

アニメキャラクター対応表の一部

バディと出会ったら自己紹介をし、その後チーム内でアイスブレーキングが行われた。バディがいたことで、すべての生徒が話さざるを得ない環境に置かれたことは、非常に良かった。チームは、建物の中の教室やロビーなど色々な場所に散らばっていたが、どのチームでも、生徒たちが必死で話をする姿があった。その後のグループ活動では、あらかじめ決められたトピックについて話をし、交流を深めた。トピックは、お互いの国の「好きなところ」「興味のあること」「好きな食べ物や音楽」「今話題になっている出来事」など。日本語を話

す仁川国際高校生や、韓国語を話す中杉生もいたが、基本的に使用言語は英語。仁川国際高校の学生の中にはとても流暢に英語を話す生徒もいたが、中杉生も普段から授業で英語を使ってはいるので、意思疎通ができないということはなく、交流を楽しんでいる様子が見られた。また、スマホの翻訳アプリを使って、会話を深めている生徒たちもいた。

バディ同士で会話を楽しむ

バディと一緒にお弁当を食べる

グループで様々なトピックについて話す

共に東アジア国際教育院が用意して下さった昼食を食べた後は、全員が講堂に集い、グループごとに着席。生徒たちはすっかり打ち解けており、和やかな雰囲気だ。舞台上のスクリーンには両校の担当生徒で共作したスライドが映し出されている。司会は、それぞれの学校から１人ずつ。事前に、密に連絡を取り合い司会台本を作ってきたそうだ。

「みなさんこんには！」と仁川国際高校の司会担当の生徒の声が会場に響き日本語での挨拶が始まると、大きな歓声と拍手。続いて、本校の生徒が「アンニョンハセヨ！」と韓国語で挨拶を始めると、さらに大きな歓声が上がった。流暢にそれぞれ相手の言語を話す生徒たちの自信と喜びに溢れた様子は、非常に感動的なものだった。

両校の生徒たちで作ったスライド

司会の生徒たち

東アジア国際教育院長よりお話を頂き、両校の教員の間で花束交換が行われた後に、いよいよ生徒たちのパフォーマンスタイムだ。まずは仁川国際高校から。２つのクラブは、韓国伝統芸能「サムルノリ」を熱演。太鼓を中心とする打楽器演奏と、お面を用いた伝統舞踊である。堂々とした演技は素晴らしく、高校生がクラブ活動として熱心に伝統芸能を実践していることに感銘を受けた。ダンス部のメンバーたちは、人気のK-POPを。J-POPのダンスも披露され、キレの良いダンスに歓声が上がっていた。

中杉の生徒たちが用意した演目は、希望生徒たちによる３つのK-POPダンスと、35人の生徒たちによる「ソーラン節」だった。仁川国際高校の生徒たちのパフォーマンスのレベルの高さに気押されていたかもしれないが、中杉生たちも冬休みに練習を重ね、衣装も工夫して臨んだ渾身の舞台。緊張しながらも堂々と舞台に立った。仁川国際高校の生徒たちは、馴染みの人気K-POPが流れると、大歓声をあげ、一緒に歌ったり合いの手を入れたりして、盛り上げてくれた。ハッピを着て臨んだ「ソーラン節」も大盛り上がり。踊り終えた生徒たちはとても充実した顔をしていた。

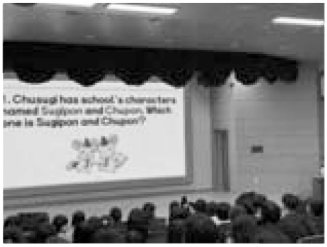
ソーラン節

New Jeans “Ditto”

Twice “What is Love?”

WannaOne “Energetic”

次に行われたのはチーム対抗のクイズ大会。内容はそれぞれの学校や文化についてで、各チーム内で答えを教え合うのは禁止とのことだった。出題は司会から２ヶ国語で行われ、映し出されるスクリーンには英語で表記されていた。皆積極的に挙手し、楽しんでいた。



中杉からの出題「どちらがスギポン？チュウポン？」

仁川国際高校からの出題「クラブの数はいくつでしょう？」

最後には手紙交換の時間が設けられていた。生徒たちは、自分のバディ生徒へのメッセージを、用意されたカードに記していく。英語だけでなく、韓国語や日本語をスマホで調べながら一生懸命書く様子は、本当に心温まるものだった。最後に全員で集合写真を撮っていよいよお別れだ。名残惜しそうに抱き合い、涙を流し、再会を約束する様子に胸が熱くなった。

自分のバディにメッセージを

スマホで調べてハングルを書く

全員で記念撮影

交流前はどの生徒も緊張と不安で一杯だったそうだが、仁川国際高校の生徒たちが温かく迎え、積極的にコミュニケーションをとろうとしてくれたおかげで、一気に距離が縮まり、短時間にも関わらず、濃密な交流を経験することができた。感想でも、この日の体験を一番印象に残った出来事として挙げている生徒が多い。多かった感想は、英語を使って相互理解を深められたことに対する喜びを語るものだ。

- *言葉の違いがあっても英語を通じてコミュニケーションを取り、お互いを知り合えることに感動しました。*
- *英語で会話を長時間成り立たせることができってうれしかった。*
- *お互いの言語がわからなくても、英語を使うことでここまで仲良くなれるのは本当に嬉しいことだなと感じた。*
- *英語ができれば、案外何とかなるということが分かった。*
- *英語でお互いの文化について話し、韓国のことについて知ることができた。*
- *言葉が違っていても、心から楽しむことができたことに感動したし、直接会ってだからこそ得るものがあったと思いました。*

さらに、仁川国際高校の生徒たちが日本文化に興味があることに驚き、日本について多くの質問をされたことが嬉しかったとの感想や、自分で勉強してきた韓国語が通じて感動したと語る感想もあった。英語を流暢に話す生徒たちや、第二外国語として日本語も勉強しているという生徒たちに刺激を受け、自分も頑張ろうと思ったという感想も多くあった。

現在の日韓の高校生の交流は、10〜20年前の交流と比べて随分進化しているように見えた。まず、言葉の壁が低くなっていること。中杉生が英語を話し慣れていること、自学で韓国語を学んでいる生徒が増えたこと、そしてスマホの翻訳アプリがあることで、以前より細やかなコミュニケーションが可能になっていた。次に、心理的な対等感があること。中杉生の多くが韓国のポップカルチャーに興味があり、仁川国際高校の生徒たちも日本に高い関心を持っていた。

お互いに好意を持ち、憧れ合うという理想的なコミュニケーションの土壌があった。最後に、交流は１日だけだが、SNSなどで関係を続けていけること。多くの生徒がSNSアカウントを交換し合い、帰国後も連絡を取り続けているようである。このように、違いを軽々と乗り越え、当たり前のように仲良く交流する生徒たちの様子は、隣国同士の高校生たちの「こうあって欲しい」姿だった。

お別れの後は、興奮冷めやらぬままバスに乗り、ソウルへ。この日の夕食は、明洞でサムギョプサルと味噌チゲ。韓国人ガイドさんがこんなに食べる日本人修学旅行生は初めてだと驚くほど、よく食べ、おかわりもしていた。

この日の夕食が一番人気

ホテルへ戻った後には、ホテルの会議室をお借りして、翌日のB&Sでの探究アクションのための最終打ち合わせ。質問することを確認したり、アンケート用のボードを作成したり、各グループで熱心に取り組んでいた。

(3) ３日目―B＆Sで探究アクションをする日―

この日は、朝ホテルを出発して景福宮へ向かい、B&Sでお世話になる大学生の皆さんと対面。４人のグループに２人の大学生がついて下さり、それぞれの探究アクションへ出かけて行く。生徒たちは、行った先で撮った写真を、随時、Google Chatで作成してあった「韓国コース」用グループに送ることになっていた。17:00の集合時間までに、ソウルの様々な場所から楽しそうな写真が送られて来て、教員は生徒たちの様子を確認することができた。

大学生たちは、ほとんどが日本語を勉強している学生で流暢に日本語を話すことができたので、生徒たちは言語に不自由することなく聞きたいことを質問し、さらには探究アクションでの街頭インタビューやアンケート調査まで手伝ってもらったそうだ。また、当日大学生たちに教えてもらい、計画していた以上

の場所を訪れることができたチームもあったようだ。いくつかのチームの探究アクションを紹介する。

「韓国エンターテイメントが人気の理由」

このグループは、HiKR GROUNDというK-POP体験やメディアアート鑑賞ができる韓国観光広報館へ行って韓流カルチャーがどのようにアピールされているかを見たり、大学路(小劇場の街)で劇場を見学したりした。同時に「日本のドラマを見るか」「韓国ドラマの魅力は何か」という内容の街頭インタビューを行った。

「兵役免除についての考えとスポーツとの関係」

このグループは、明洞や南山公園など観光地を巡る過程で、街で出会った人に「兵役・兵役免除についてどう思うか」というインタビューを行った。

「外国人観光客向けのサービスの充実さ、日本との違い」

このグループは、明洞の店舗や食堂でインタビューをし「どの国からの観光客が多いか」を調査。また、B&Sの大学生に「キャッシュレスについて」話を聞き、駅や街の表示の外国語表記や、市場での接客の様子を見て回った。

「日本と韓国のコンビニの違いから２国間のニーズ、傾向の違いなどを調査」

このグループは、いくつかのコンビニエンスストアを訪れ、コンビニで販売されている商品やサービスを調査。また、店員に「よく売れるものは何か」インタビューした。

「チマチョゴリと旧正月」

このグループは、韓服レンタル店で実際にチマチョゴリを体験しながら、店員の方に韓服に関するインタビュー、街頭では「家に韓服があるかどうか」をアンケート調査した。

「New Korean Food or Old Korean Food」

このグループは、大学のキャンパスを訪れて学食の見学をし、街では「新しい韓国料理と伝統的な韓国料理どちらが好きか」というアンケート調査を行った。

「K-POPのアイドル文化」

このグループは、街頭インタビューで「K-POPイベントに参加したことがあるか」「どのように応援するか」などを調査。実際にCDショップを訪れて販売の方法を見たり、有名芸能事務所を訪れたりした。

「韓国の美意識、美容」

このグループは、街頭調査で、「どのような美容ケアを実践しているか」を調査。また、ダイエット食品を扱っている人気チェーンレストランへ行きその実態を体験した。

「日韓の文化や歴史による見え方の違い」

このグループは、西大門刑務所博物館を訪れ、日本の植民地支配時代について学び、B&Sの大学生から韓国の歴史教育について話を聞いた。またショッピングモールで、「日本が好きか」「日本で好きなことは何か」などアンケート調査を行った。

チマチョゴリを来て景福宮

ソウルワールドカップ競技場

南山公園のNソウルタワー

１日の行程を終えて、弘大で再集合した時には、どのグループも完全に打ち解けており、その表情からも、どんなに充実した１日を過ごしてきたかが伺えた。この日も、涙を流して抱き合い、別れを惜しむ姿がたくさんあった。

そのまま徒歩で移動し、弘大の食堂で夕食。メニューは「チーズダッカルビ」だったが、B&Sの最中に食べ歩きをして満腹だった生徒が多く、前日までのように完食とはいかなかった。とはいえ、研修旅行最後の夕食の場は、充実の

辛すぎるという声もあった

時間を満喫し気分が高揚している生徒たちの熱気に溢れ、この韓国研修旅行を実現できてよかったと感じ入る時間となった。

その後、バスで明洞に移動して、「NANTA」を鑑賞。

「NANTA」は韓国伝統芸能と現代風コメディを掛け合わせたセリフのないミュージカル。20年以上のロングランを続ける韓国No.1人気エンターテイメントである。公演前には、中杉生の鑑賞を歓迎するスライドが映し出され、期待が高まる。生徒たちは、想像以上の面白さと、俳優たちの高い身体能力や芸達者ぶりに夢中になり大いに盛り上がった。舞台中盤での観客参加の場面では、中杉生たちが選ばれて舞台に上がり、俳優たちの指示通りに動き頑張っていた。前日に仁川国際高校で伝統芸能「サムルノリ」を観ていたこともあり、舞台上で披露される伝統芸能の部分を意識することもできたようで、「日本で似たような趣向のパフォーマンスはないのか？」などと新しい疑問を抱いた生徒もいた。

(4) ４日目―班別自主研修で好きな場所へ行く日―

最終日は、朝食を済ませ荷造りができたグループから、行きたい場所へと向かう。このグループは生徒たちが自由に組み、行き先も自分たちで決めた。とはいえ、13:00にはホテルに戻らなければならないので、かなりタイトなスケジュールになる。前日は現地の大学生と一緒だったが、この日は自分たちだけで行き先までの経路を調べ、地下鉄に乗らなければならない。買い物をするにしても助けてくれる人はいない。多少の苦労はあったようだが、仁川国際高校での交流、B&Sでの大学生との１日の中で、「韓国の地で現地の人とコミュニケーションをとりながら行動すること」に対する自信は、間違いなく積み上がっている。集合時間に駆け込んで来たグループもあったが、皆時間通りにホテルに戻って来ることができた。その後、バスに乗り金浦国際空港へ向かい、帰途

についた。

5. 研修旅行を終えて

この４日間が、生徒たちの心を大きく動かす体験になったのは間違いない。現地でも、日を追うごとに、生徒たちは生き生きとした表情を見せ、中杉生同士の結束も高まって行った。

それは、「探究アクション」の存在と、韓国の人たちとの交流によってもたらされた、この韓国研修旅行ならではの成果であると思う。

(1)「探究アクション」で深まる理解、強まる絆

「探究アクション」では、どのチームも、自分たちで用意した質問を現地で韓国の人たちに投げかけ答えてもらうという経験をした。通常の旅行で、道行く人やお店の人に、特定のトピックに関して話しかけるということはまずない。今回は「探究アクション」として「現地調査をしなければならない」という枠のために、全員が挑戦せざるを得なかった。そして頑張って一歩踏み出した先には、多くの現地の人たちが「日本人の高校生」に好意的で、質問に快く答えてくれるという現実があった。

- *街中で全員が率先して話しかけに行ったり、お店の人にも知りたい質問、全て答えていただけた。*
- *約10人もの韓国の方にインタビューを行ったが、色んな意見を聞けて楽しかった。*
- *現地の学生にアンケートをとることで、ネットには載っていないリアルな実情を知ることができてとても良かった。*

また、日本語を話せるB&Sの大学生たちのサポートでより踏み込んだ調査ができたというグループもあった。

・*現地の大学生と調べることで実態をより知ることができた。*
・*楽しみつつ、大学生のサポートのおかげできちんと調査もできた。*

そして、選んだテーマが自分の興味に基づいたものであったことで、調査活動に積極的に取り組めたという声も多くあった。

・*「探究」という課題が無ければ自ら取り組まなかったであろうテーマについて自分の力で調査をできたのが良かった。*
・*僕らが調べた内容が兵役という少しセンシティブな内容だが、だからこそ現地での意見はとてもためになったし、多くのことを学ぶことができた。*
・*ただ旅行という訳ではなく自分の興味のあるテーマについて現地で見るだけでなく現地の大学生の話を実際に聞くことができたのが良かった。*
・*自分の興味のある分野について、同じ興味を持った友達と調べられたことが凄く良かった。*

「探究アクション」のグループは好きなもの同士で組んだグループではなかったので、最初の頃は遠慮し合ったり、意思疎通が上手くいかないグループもあった。しかし、異国の地での「調査活動」というチャレンジに向かって準備を重ね、ソウルの町で１日を過ごす中で連帯感が生まれ、チームとしても成長した様子が見てとれた。感想の中には「新しい友達と一緒に頑張ることができた」という言葉が頻繁に出てくる。

ただ、「問い」のたて方や、調査の仕方などもっと改善できる点はあるので、現地での活動をより充実させ、もう少し深い考察に結びつけることができるように、次回は事前準備の段階でより踏み込んだアドバイスをしたいと思う。

(2) 韓国の人たちとの交流で出会う「新しい自分」

「探究アクション」の存在に加え、さらに生徒たちの心を動かすことになったのは、間違いなく、仁川国際高校やB&Sで交流した人たちとの出会いだ。交流の中で彼らの優しさや率直さ触れて、中杉生たちの心も解放され、普段よりも積極的に自己表現できるようになっていく様子が見えた。実際、生徒たちの感想には、出会った人が「優しかった」「親切で嬉しかった」という言葉が頻繁に現れる。また、次の感想にあるように、日本人同士の交流では体験し得ないような「情深さ」や「率直さ」に驚き、感動した生徒も多かった。

携帯の画面とにらめっこしながら一生懸命に平仮名と漢字を書く彼に感化されて、僕も真似してハングル文字で思いつく限りの感謝の言葉を書いた。ほんの数時間前に会っただけの僕にここまでしてくれる彼の気持ちが何より嬉しかった。

そして、当初は不安を感じていた「交流」や「探究アクション」を乗り越えられたこと、乗り越えるだけでなく想像をはるかに越えて楽しめたことが、達成感と共に大きな自信となったのは間違いない。

交流も探究アクションのインタビューも、最初は不安な要素しかなかったけれど、実際にやってみたらなんとか上手くいったことばかりだった。何事も恐れずにトライすることが大切だと実感できた４日間だった。

このような経験を経て、「*私も他の国の人と関わるときに積極的に関わりたい*」「*次は日本に来てもらい、日本で色々なことを教えたり、案内したりしたいと強く感じた*」など、今後の目標を語る生徒もいる。韓国の人たちと出会いを通して、「新しい自分」とも出会い、視野を大きく広げた生徒たちの姿が浮かび上がる。

6. おわりに

いつの時代でも、異文化体験が新しい世界、新しい自分との出会いであることに変わりはない。今回は、さらに「探究アクション」があったことで、グループのテーマを軸に現地の高校生や大学生との交流の内容を深めることができた。そして、B&Sでの街歩きも、単なる観光にとどまらず、個々の内的モチベーションに基づく学びを深められる場となった。

希望制の海外研修ではなく学年の研修旅行だったため、当初は、韓国に否定的なイメージを持っていたり、異文化交流に消極的な生徒もいた。しかし、研修旅行での体験を通して「*自分の視野の狭さに気付いた*」り、「*韓国が大好きになった*」り、韓国に対する気持ちが180度変わったという生徒や、意外とコミュニケーションできることに驚き「*色々な国の人と交流してみたいと思うようなった*」と言う生徒もいる。これこそ、全員参加必須の研修旅行の醍醐味であり、研修旅行で海外に行く意味だと思う。この研修旅行をきっかけに「*また必ず韓国に行く*」と宣言したり、いつか「*韓国で働きたい*」と語ったり、生徒たちの気持ちはすでに未来に向いている。

「現在の高校生にふさわしい韓国研修旅行とは」という問いと共に歩んだ1年間。この時点での答えは、やはり、生徒たちが見せてくれた。まず、生徒たち自身の興味を入り口に、さらに広い視野、新しい問いへとステップアップできるように導ける場であること。ステップアップを導く方法にはさらに検討が必要だが、それが教員側の理想の押し付けにならないように工夫しなければならない。そして、学校交流やB&Sを生徒たちが最大限に力を発揮できる場にすること。これは参加する生徒によって内容が変わってくるはずなので、前例にとらわれず、その年度の生徒たちにとって一番の状態に持っていけるようにサポートしなければならない。「楽しさ」と「学び」・「成長」は両立すると確信して、来年度も、生徒たちが心からの笑顔を見せてくれるような研修旅行を実現させたい。